

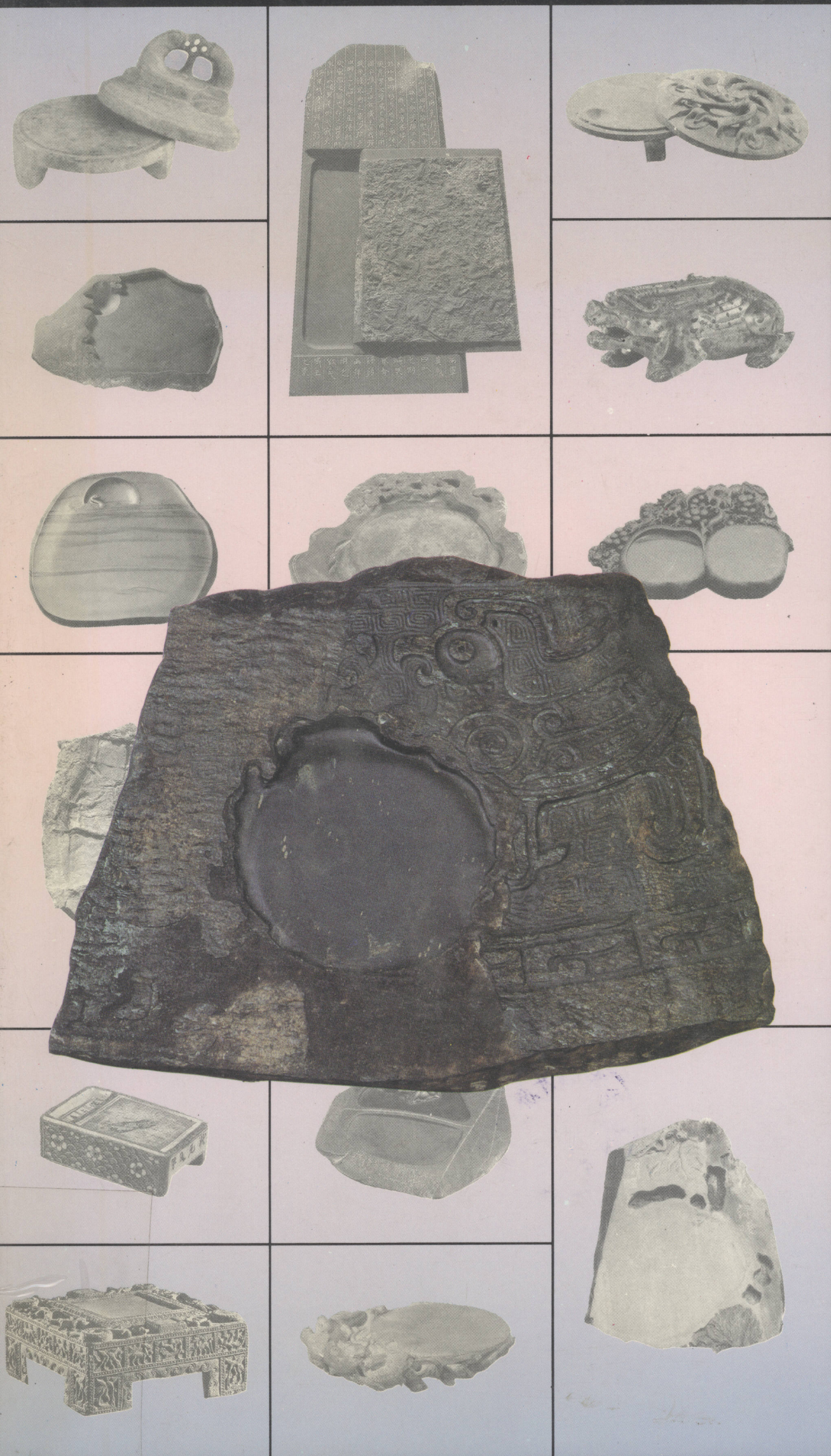
蔡鴻茹 胡中泰 主編

中國名硯鑒賞

啓功題籤



山東教育出版社



山東教育出版社

一九九二年·濟南

中國名硯鑒賞

蔡鴻茹 胡中泰 主編

魯新登字 2 號

中國名硯鑒賞

蔡鴻茹 胡中泰 主編

出版者：山東教育出版社

印刷者：山東新華印刷廠

發行者：山東省新華書店

版次：1992年7月第1版 1992年7月第1次印刷

開本：787×1092 8開本

印張 42 \ 插頁 4 \ 字數 270千 \ 印數 1,600冊

標準書號 ISBN 7-5328-1328-2/J·22 定價：180.00圓

主 編 蔡鴻茹 胡中泰

編輯委員會

主任 王洪信

編委 (以姓氏筆劃爲序)

胡中泰 胡 傑 張淑芬 楊 玲

蔡鴻茹 劉克唐 劉演良

主要攝影師

李國強 胡 錘 劉志崗 朱曉雲 倪靜波

韋德昌 劉士剛

日文譯者 王海清 姚麗娟 斯親乎

提供硯照的單位

故宮博物院 天津市藝術博物館

上海市博物館 天津市文物處

安徽省博物館 廣東省博物館

山東省博物館 安徽省文物總店

廣東省文物管理委員會

徐州市博物館 安徽歙縣制硯廠

廣東肇慶端溪名硯廠 揚州漆器廠

江西婺源縣硯臺廠

責任編輯 胡鋼泰

封面裝幀

王玉平

版式設計

硯藝集錦

精華薈萃

(代 序)

楊伯達

山東教育出版社即將出版《中國名硯鑒賞》以饗讀者，一批沉睡多年、被譽為“文房重要文具”的硯臺得以重見天日，面向寰宇，此乃令人歡欣鼓舞的一大快事！

本書由著名古硯鑒賞家蔡鴻茹女士和傑出的龍尾硯（歙硯）雕刻藝術家胡中泰先生擔任主編。由古硯覽賞家與硯雕藝術家合作著書立說，誠屬前所未聞而又行之有效的良方，值得提倡。是書使鑒評與工藝融於一體，美學與技法相結合，此書堪稱硯藝集錦，在書壇上獨放異彩。

此書遴選了故宮博物院和諸省（市）的重要文博單位及私家收藏的珍稀硯臺貳佰件。這些入選的硯臺，就硯材而論，包括聞名遐邇的端石、歙石、洮河石、紅絲石、燕子石、松花石以及澄泥等十幾種；就年代而言，上起新石器時代，中經漢、魏、晉、隋、唐、宋、元、明、清，下迄現代，其中不乏歷代硯雕名家的傑作。是書還收錄了關於幾種著名硯材的論述與硯雕藝術的專論，以供讀者賞硯時參考。

此著有着較高的藝術、學術和史料價值是無庸諱言

的。譬如頗有造詣的作者與編輯為本書的付梓，付出了大量的心血，對數以千計的硯臺作過反復研究鑑定，遴選佼佼者，奉獻給廣大讀者。可謂我國古今硯臺的精華薈萃。尤其，絕大部分硯照都是由享有盛名的攝影師拍攝的，圖像清晰，質感逼真，具有古色古香的韻致，令人心曠神怡，得到高雅的美感享受。若追溯我國硯藝的歷史成就，雖已達到了極高的境界，但是，至今還未出版過有關的藝術史論專著，由于本著多少涉及上述有關內容，且有一定的深度和廣度，所以，她必將在一定程度上填充了這一空白，並將對我國硯學理論的研究和發展起着催化與推動的作用。

當此書行將問世之際，我除了深表敬佩之外，還熱誠地向硯界同仁、硯臺鑒藏家以及廣大的硯臺愛好者鄭重地推薦本書，並相信她定會獲得讀者的共鳴與贊賞。同時，我也希望她能夠廣為傳播，以弘揚祖國優秀的藝術傳統，促進並推動我國硯文化的進一步發展與繁榮。

硯芸の輝き

(代 序)

楊 伯 達

山東教育出版社は、いますぐ『中国名硯鑑賞』を出版し、読者の皆様方を喜ばせ、多くの長年「文房の重要文具」と誉められた硯が改めて世間に顔を出し、世界に向かおうとしている。これは、確実に一つの大きな喜ばしいことなのである。

この本は、有名な古硯観賞家の蔡鴻茹氏と優れた龍尾硯（龍硯）の彫刻芸術家の胡中泰氏が主編を担当する。古硯観賞家と硯彫刻芸術家が協力して本を書くとは、誠に前代未聞であり、有効なやり方であって、提唱に値するものなのである。観賞・評価と工芸を一つに融合し、美学と技法が結びつき、この本は、硯芸の集まりであって、異彩を放つものなのである。

この本は、故宮博物院及び各省（市）の重要な文物博物部門と自家収蔵の珍奇な硯を二百個選出した。これらの入選した硯は、石料について言えば、遠近に名の知られた端石・龍石・洮河石・紅絲石・燕子石・松花石及び澄泥等十何種類もの硯材があり、年代から言うと、上は新石器時代から始まり、中間に漢・魏・晋・隋・唐・宋・元・明・清の時代を経て、下は現代に至り、しかもその中に歴代の硯彫刻名家の傑作がいっぱい入っている。この本は、また何種類もの有名な硯材の論述及び硯彫刻芸術の専門論述を収録し、読者の硯を観賞する時の参考のためにしたものなのである。

この本は、高い芸術・学術・史料の価値のあることは、言う

までもない。例えば、頗る造詣の高い作者及び編集者がこの本に力を注ぎ、大量の心血を払われ、何千もの硯を何回も繰り返し研究し、鑑定し、その中の優れたものを選びだして広範な読者に捧げたものなのである。わが国の古代の硯の大集会とすることができるのである。なかでも、圧倒的多数の硯の写真は、みな有名な撮影師によって撮影されたものであり、映像がはっきり映り、質感が真に逼り、懐古的な趣があって人々を喜ばせ、高雅な美的感受を与えるものなのである。若しもわが国の硯芸術の成績を逆るとすれば、それは極めて高い境界に達したということが出来るが、今まで芸術史論に関する専門著作はまだ出版されておらず、この本が多少なりとも上述の内容に触れ、それに一定の深さと広さがあるために、一定の程度までその空白を埋めたものであり、そしてわが国の硯学理論の研究と発展に媒介と推進の役割を果たすものなのである。

この本の今に世を問おうとしている今頃、わたしは深い敬服の意を表すると同時に、熱い心を込めて硯界の同人、硯の鑑定家・収蔵家及び広範な硯愛好者に丁重にこの本を推薦し、しかもこの本がきつと読者の皆様方の共鳴と賞賛を獲得できると信じている。同時に、それが更に広く伝わり、祖国の優秀な伝統を揚げ、わが国の硯文化の更に一步の発展と繁栄を促進し、推進するよう希望している。

目 錄

序言 圖版

1.新石器時代方格石硯	(1)	40.元飲翰人物澄泥硯	(57)	82.清葫蘆形端硯	(109)
2.新石器時代石硯	(1)	41.元鏤空刻花銅暖硯	(59)	83.清白菜端硯	(111)
3.漢雲龍紋圓石硯	(3)	42.元日月白石硯	(59)	84.清浴鳳端硯	(111)
4.西漢長方形漆盒石硯	(3)	43.明葫蘆澄泥硯	(61)	85.清高兆赤壁端硯	(113)
5.漢彩繪嵌銀箔漆硯	(5)	44.明陳洪綬長方抄手端硯	(61)	86.清瑯嬛仙館端硯山	(115)
6.漢雙鳩蓋三足石硯	(7)	45.明袁褰隨形端硯	(63)	87.清朱杰天鵝端硯	(115)
7.東漢獸形銅硯	(9)	46.明心齋小像几形端硯	(63)	88.清“三湘圖”化石硯	(117)
8.漢十二峰陶硯	(11)	47.明蟾蜍澄泥硯	(65)	89.清龍紋端硯	(117)
9.漢三足石硯	(13)	48.明長方抄手眉子歛硯	(65)	90.清李鴻賓恭製長方端硯	(119)
10.東漢鏤金獸形銅硯	(15)	49.明圭式端硯	(65)	91.清高鳳翰雪浪金星溜石硯	(121)
11.晉青釉三足瓷硯	(17)	50.明長方抄手歛硯	(67)	92.清高晟摹刻翁方綱臨蘭 亭序端硯	(123)
12.北魏石雕方硯	(19)	51.明耳杯形澄泥硯	(67)	93.清高鳳翰田田端硯	(123)
13.南朝獸蹄五足瓷硯	(21)	52.明王鐸橢圓端硯	(67)	94.清長虹端硯	(125)
14.隋赭釉多足瓷硯	(23)	53.明十八羅漢洮河石硯	(69)	95.清雲月端硯	(127)
15.唐箕形石硯	(25)	54.明荷魚硃砂澄泥硯	(71)	96.清劉源雙龍端硯	(129)
16.唐箕形紅絲石硯	(25)	55.明碧玉硯	(73)	97.清顧二娘製洞天一品端硯	(131)
17.唐二十二柱足圓陶硯	(27)	56.明鰲池歛硯	(75)	98.清水天一色端硯	(133)
18.唐多足白瓷硯	(29)	57.明橢圓形歛硯	(75)	99.清瓜式端硯	(135)
19.唐雙盂多足瓷硯	(31)	58.明長方紫石硯	(75)	100.清嵌端石銅暖硯	(137)
20.唐三堂梅花石硯	(33)	59.明顧從義摹刻石鼓文石硯	(77)	101.清狀元及第青花瓷硯	(139)
21.宋古桃州風雨端硯	(33)	60.明萬字鼓形鐵暖硯	(77)	102.清荷蟬天壇石硯	(141)
22.南宋圓形三足歛硯	(35)	61.清鳳字形歛硯	(79)	103.清梅花石硯	(141)
23.宋眉紋棗心歛硯	(35)	62.清趙在田長方端硯	(81)	104.清鳳味石硯	(143)
24.宋包授長方石硯	(35)	63.清廟前青歛硯	(81)	105.清杉木硯	(145)
25.宋六十三柱海水紋長方 抄手端硯	(37)	64.清雙螭壽字長方歛硯	(83)	106.清朱彝尊肖像端硯	(145)
26.宋蓬萊山洮河石硯	(39)	65.清荷葉歛硯	(85)	107.清四犧足端硯	(145)
27.宋蘇軾鵝式澄泥硯	(41)	66.清千斤猴王端硯	(87)	108.清獸面紋鼉磯石硯	(147)
28.宋長方抄手洮河石硯	(43)	67.清白鶴端硯	(89)	109.清瓶形木硯	(149)
29.北宋張思淨造澄泥硯	(45)	68.清綠繞端硯	(91)	110.清盧棟製漆砂硯	(151)
30.宋鸚鵡石硯	(45)	69.清荷葉綠端硯	(93)	111.清周亮工箕形端硯	(151)
31.宋箕形綠石硯	(45)	70.清犀牛望月端硯	(95)	112.清雙色松花石蓋硯	(153)
32.宋石渠石硯	(47)	71.清阮福銘井田端硯	(97)	113.清伏虎松花石小硯	(155)
33.宋蕭珍石硯	(49)	72.清紀昀橢圓端硯	(97)	114.清長方賀蘭石硯	(157)
34.元長方歛硯	(49)	73.清石函端硯	(97)	115.清石榴形石硯	(159)
35.元鵝池歛硯	(51)	74.清雲螭端硯	(99)	116.清海天旭日歛硯	(161)
36.元箕形鐵硯	(51)	75.清乾隆端石賞硯	(99)	117.清橢圓歛硯	(161)
37.元卧牛歛硯	(51)	76.清端溪圖端硯	(101)	118.清長方歛硯	(161)
38.元雙獅石硯	(53)	77.清三多九如端硯	(101)	119.清松花石暖硯	(163)
39.元蓬萊仙島石硯	(55)	78.清仿宋四十九星柱端硯	(101)	120.清嵌蚌池松花石硯	(165)
		79.清猫蝶端硯	(103)	121.清龍銜魚石硯	(167)
		80.清潛龜端硯	(105)	122.清盧葵生漆沙硯	(167)
		81.清雲龍戲珠端硯	(107)		

123.清龜螺澄泥硯	(169)
124.清瓦形澄泥硯	(171)
125.清綠澄泥硯	(173)
126.清瓶式綠澄泥硯	(175)
127.清眉紋歙硯	(177)
128.清朱彝尊爲馬思贊 銘澄泥硯	(177)
129.清井字形澄泥硯	(179)
130.清允祥珍藏澄泥硯	(181)
131.清海屋添籌澄泥硯	(181)
132.清長方歙硯	(183)
133.清船形歙硯	(185)
134.清長方形歙硯	(185)
135.清描金蟾蜍澄泥硯	(187)
136.清佛手形澄泥硯	(187)
137.近代吳昌碩銘端硯	(187)
138.近代雙色龍紋賀蘭石硯	(189)
139.九龍荷葉硯	(191)
140.古泉硯	(193)
141.嶺南飄香硯	(195)
142.天然硯	(197)
143.別有洞天硯	(199)
144.兩岸風光總宜人硯	(201)
145.星湖春曉硯	(203)
146.歲寒三友硯	(205)
147.半畝星雲硯	(207)
148.嫦娥奔月硯	(209)
149.九龍戲水硯	(211)
150.喜鵲登梅硯	(213)
151.雙鳳朝陽三足硯	(215)
152.黃山日出硯	(217)
153.北魏造像殘碑硯	(219)
154.龍水硯	(221)
155.銅鏡硯	(223)
156.延光殘碑硯	(225)
157.春秋戀硯	(227)
158.瓦魂硯	(229)
159.天地一沙鷗硯	(229)
160.古鉞硯	(231)
161.飛來石硯	(231)
162.凝古硯	(233)
163.丹鳳朝陽硯	(235)

164.蟠螭單硯	(235)
165.雙鳳硯	(235)
166.丹鳳硯	(235)
167.磨菇硯	(237)
168.金鯉硯	(239)
169.舉盃邀月硯	(241)
170.荷魚硯	(243)
171.仿古抄手硯	(245)
172.富士石鼓硯	(247)
173.雲月硯	(249)
174.竹簡硯	(251)
175.月之從星硯	(253)
176.“壽”字石函硯	(253)
177.陶尊硯	(255)
178.龜硯	(257)
179.雲月硯	(259)
180.琅玕刻石硯	(261)
181.天籟硯	(263)
182.雙魚潭硯	(263)
183.甲骨硯	(265)
184.聽雨硯	(267)
185.漢畫硯	(267)
186.背負青天硯	(269)
187.玉女靜思硯	(271)
188.江濤硯	(273)
189.荷葉硯	(275)
190.田田有井硯	(277)
191.慾來硯	(279)
192.仿青銅皿硯	(279)
193.雙獅硯	(281)
194.旭日硯	(283)
195.靈隱硯	(285)
196.大滌草堂硯	(287)
197.泰山攬勝硯	(287)
198.東方巨龍硯	(289)
199.金龜獻書硯	(289)
200.蟾吐七星硯	(289)

專論

書林摯友 國之瑰寶	蔡鴻茹 (291)
對硯雕藝術發展的思考	胡中泰 (296)

端溪硯淺談	劉演良 (303)
歙硯源考	胡中泰 (305)
洮河石硯	蔡鴻茹 王堃 (308)
澄泥硯探索	徐文達 (310)
淄硯	張茂榮 (312)
揚州漆沙硯	張燕 (314)
松花石硯	張有發 (317)
鮮妍多彩的紅絲硯	闫家憲 (318)
清代的女雕刻家——顧二娘	張淑芬 (320)
編後記	胡鋼泰 (323)

注：硯照順序是按大的朝代順序編排的，但從版面整體的節奏考慮，在朝代內打亂了年代的順序。

注：硯の寫眞の順序は、大きい時代の順序に基づいて並べたが、版面全体の美を考慮して、同一時代内の年代は自由にさせてもらった。



1 新石器時代方格石硯

2 新石器時代石硯



新石器時代方格石硯

長 17.8 釐米，寬 14 釐米。

1958 年陝西寶鷄仰韶文化遺址出土，距今約五千年。橢圓形，有大小兩個凹槽，殘存少量紅色顏料。

新石器時代遺址曾出現許多研磨器，有的用於研磨穀物，有的用於研磨顏料，其形狀有的比較規則，有的不甚規則，此件屬較為規則之類，而它的形狀又與後來的書寫所用之硯形相似，故常被認為是最古老的硯。

現藏中國歷史博物館。

（摘自《中國博物館》叢書之五《中國歷史博物館》

李國強 劉士剛 翻攝）

長さは 8 cm あり、幅は 6.4 cm である。同時に出土したものには、研棒・陶器の水入れ及び絵具があり、ひとそろいの絵具道具なのである。

（『姜寨』より 写真 李国強）

新石器時代の方形石硯

長さ 17.8 cm、幅 14 cm

1958 年に、陝西省の宝鷄仰韶文化の遺跡から出土したものであり、いまから約五千年も前のものである。橢円形のものであり、大小二つの凹槽があつて、少量の赤い絵具が残存している。

新石器時代の遺跡より研磨器がたくさん出ている。穀物の研磨に使うものもあれば、絵具の研磨に使うものもあり、わりと規則的な形をしたものもあれば、あまり規則の整わぬものもある。この硯は、わりと規則的なものであり、その形は後の書写用の硯とよく似ていて、したがって最古の硯と認められたのである。

この硯は、いま中国歴史博物館にて収蔵している。

（『中国博物館』叢書の五『中国歴史博物館』より

写真 李国強 劉士剛）

新石器時代石硯

長 8 釐米，寬 6.4 釐米。

1972 年至 1979 年陝西臨潼姜寨二期遺址出土，距今約五千余年。

硯平面略呈方形，一角殘，硯面及底平整光滑，器表中部略偏處有直徑 7.1 釐米，深 2 釐米的規整的圓形白窩，窩內壁及硯面上有許多紅顏料痕迹。白窩上有一梯形扁平石蓋，長 8 釐米，寬 6.4 釐米。同出還有研棒、陶水杯及顏料，為一套完整的繪畫工具。

（摘自《姜寨》 李國強 翻攝）

新石器時代の石硯

長 8 cm、幅 6.4 cm

1972 年から 1979 年の間、陝西省の臨潼姜寨二期遺跡から出土したものであり、いまから約五千余年前のものである。

この硯は、やや方形を呈し、一角が欠けている。表面と背面が平らで滑らかであり、その表面のやや中央をはずれたところに直徑 7.1 cm、深さ 2 cm の円形の窪んだところがあり、その窪んだところの壁及び表面に数多の赤い絵具がついている。窪んだ部分に台形の偏平の石の蓋があり、その



3 漢雲龍紋圓石硯

4 西漢長方形漆盒石硯



漢雲龍紋圓石硯

直徑 36 釐米，高 11 釐米。

1978 年河南省南樂縣漢宋耿洛墓出土。圓形，硯面光滑，耳杯形水池。蓋紐由浮雕六條相互纏繞的飛龍組成，龍身陰刻龍鱗，龍翼飾以羽毛，龍足飾以爪趾，六龍首匯聚，戲一寶珠，寶珠上銘“五銖”二字。製作者以浮雕與線刻相結合的高度技巧，雕刻出羣龍雲游飛動，歡快流暢的景情。

龍是漢代崇尚的四神之一，用它作為藝術作品圖案，已較普遍，作為硯的蓋紐，亦較常見，如河北地區曾出土過盤龍石硯蓋，它是由七龍盤繞，中間亦為一五銖錢形，與此硯大同小異。此硯還有一個特點是硯面邊緣有一周銘文，長達四十餘字，有紀年（漢延熹三年，即公元 160 年）、硯值，墓主人身份等，在已發現的漢硯中，銘文之長，內容之詳，此為首例，為研究硯臺的銘文情況提供了資料。

此硯現藏河南省文物研究所。

（摘自《全國出土文物珍品選 1976—1984》

李國強 劉士剛 翻攝）

漢の雲龍紋円石硯

長さ 36cm、幅 11cm

1978 年に、河南省南樂県の漢・宋耿洛墓から出土したものである。この硯は、表面が滑らかであり、池が湯飲みに似ている。蓋の紐は、六頭の纏わりあった飛龍の浮彫からなり、龍の身体中に鱗を陰刻し、翼は羽毛をもって飾り、足は爪をもって飾っている。六頭の龍は頭を揃えて珠に戯れ、その珠に『五珠』の二字を銘じている。製作者は、浮彫と線刻の結びつきという高い技巧をもって群龍が雲を遊ぶ明るくて楽しい情景を彫りだしたものである。

龍は、漢の時代尊ばれていた四神の一つである。それをもって芸術品の図案とするのはよくあることであり、それを硯の蓋の紐にすることもよく見られるのである。例えば、河北省から龍の纏わった石硯の蓋が出土している。それは、七頭の龍が纏わりあい、その真ん中が五珠の銭形をし、この硯とよく似ているのである。この硯には、もう一つの特徴がある。それは、その縁には一回りの銘文があり、四十餘字もある。年号（漢延熹三年、すなわち紀元 160 年）があり、硯の値、墓主の身分などがあって、いままで発見された漢の硯の中で銘文の長さ・内容の詳しきの面でこの硯が一番であり、硯の銘文の研究において貴重な資料を提供したものである。

この硯は、いま河南省の文物研究所にて収蔵している。

（『全国出土文物珍品選 1976～1984』より

写真 李国強 劉士剛）

西漢長方形漆盒石硯

長 21.5 釐米，寬 7.4 釐米，高 0.9 釐米。

山東臨沂金雀山西漢墓出土。木胎盒，裏外髹漆彩繪，內鑲石板，石板上方有方形研石，同時出土還有毛筆、木牘等。

引人注目的是盒底與盒蓋繪有大致相同的漆畫，以朱紅、土黃、深灰三色繪出虎、熊、鹿、羊等獸，形象各異，相互呼應，並以流雲紋相間，雲紋及動物均以黑線渲染勾勒，使圖案清晰生動，尤其是雲紋筆調流暢，富於層次，回環纏繞，使整個畫面暈然一體。表現了漢代繪畫藝術的高度水平。

近年漢代古墓中常常出現長方形石板，配以精致的木盒，或彩繪漆盒。或稱黛板，或稱石硯。黛板為研磨黛粉用以婦女美容；石硯則用於研墨書寫，這兩種功能兼而有之。

（摘自 1984 年第 11 期《文物》 李國強 劉士剛 翻攝）

西漢の長方形の漆の箱の石硯

長さ 21.5cm、幅 7.4cm、高さ 0.9cm

山東省臨沂金雀山西漢墓からの出土品である。木の箱があり、内側も外側も漆で模様を塗り、内側に石板を嵌め、石板の上に方形の研石がある。同時に出土したものには、筆や木牘などがある。

箱の底の部分と蓋に大体同じような漆の絵が塗られてあることは、注目すべきことなのである。朱紅・土黄・深灰の三色で虎・熊・鹿・羊などの獣の模様を描き、形がそれぞれ異なりながら互いに呼応し、そしてそれぞれの間に流雲紋を入れている。雲紋と動物は、みな黒い線でその縁を取り、図案をくっきりさせていきいきとしたものにし、なかでも雲紋は、筆調が流暢であり、高低がはっきりしているののである。これは、漢の時代の絵画芸術の高い水準を物語ったものである。

近代に入ってから、漢の時代の古墓からよく精巧な木箱で飾った、或いは絵具を入れた漆の箱付の長方形の石板が出土するのである。或いは黛板と称し、或いは石硯と称する。黛とは黛粉を研磨して婦女の美容に用いることを言い、石硯は、墨を磨いて書写に使うことを言う。つまり、この二種類の職能を兼ねたものなのである。

（1984 年第 11 期『文物』より

写真 李国強 劉士剛）

5 漢彩繪嵌銀箔漆硯



漢彩繪嵌銀箔漆硯

長 19釐米，寬 8.2—9.8釐米，高 6.6釐米。

江蘇邗江姚莊 101 號西漢晚期墓出土。木胎，平面呈鳳字形，中間有三角形泄水孔，以羊首木塞相堵，硯身髹黑漆，側面飾貼銀箔人物、禽獸，硯背朱色漆地飾黑色雲氣中騰龍飛鳳，整個硯工藝精湛，色彩鮮明。

我國漆器制造和使用較早，在距今五千多年的新石器時代即已出現髹漆彩繪，到了漢代已有空前發展，近年曾在漢墓中出現大量精美漆器。楊州是我國盛產漆器地區之一，此漢漆硯的出土，不僅說明該地區制造工藝的高超水平，也說明漆器制造歷史悠久。此硯形與其他石制漢硯形迥異，為我們認識漢硯形制及漆硯的歷史開拓了視野。

現藏楊州市博物館。

（摘自《中國美術全集·工藝美術編 8 漆器》

李國強 劉士剛 翻攝）

漢の彩繪の銀箔嵌めの漆硯

長さ19cm、幅8.2～9.8cm、高さ6.6cm

江蘇省の邗江姚莊 101 号西漢晚期墓からの出土品である。

木胎を持ち、平面であって鳳の字の形をし、真ん中に三角形の泄水孔があって、羊首木の栓がある。硯の全体に黒漆が塗ってあり、側面に銀箔の人物・鳥・獸を貼って飾り、背面の朱色の漆の地に黒色の雲気の中に龍や鳳が飛び上がり、硯全体の工芸が精巧であって、色彩が鮮明である。

わが国は、漆器の製造と使用がはやい。いまから約五千年も前の新石器時代に已に漆塗りの彩繪が現れ、漢の時代に入ると、空前の発展を見せたものなのである。近年になってからは、漢の時代の墓の中から大量の精巧な漆器が出土しているのである。楊州は、わが国の有名な漆器産地の一つである。この漢の漆器の出土は、この地方の製造工芸の高い水準を物語っているだけでなく、漆器製造の歴史の長さも物語っているのである。この硯の形は、その他の石製漢硯の形と全く異なり、漢硯の製形及び漆器の歴史を見る視野を広めてくれたものである。

この硯は、いま楊州市博物館にて収蔵している。

（『中国美術全集・工芸美術編 8 漆器』より

写真 李国強）



6 漢雙鳩蓋三足石硯

漢雙鳩蓋三足石硯

直徑 14.8釐米，通高 15.7釐米。

硯分底和蓋兩部分，蓋部雕立體雙鳩，兩鳩相吻，嬉嬉相鬥，雕鏤簡括，形象生動，蓋面四週傾斜呈覆碗狀，蓋內正中一凹窩，為存放研石之用。圓形硯面，邊緣子口低凹可承蓋。硯底三獸足鼎立。硯石呈黑灰色。

漢硯形制早期簡畧，晚期復雜，此硯當為東漢製品。

現藏故宮博物院。

(楊 玲 文 胡鍾 劉志崗 攝)

漢の双鳩蓋三足石硯

直径14.8cm、高さ15.7cm

この硯は、底と蓋との二部に分かれている。蓋には、立体の二羽の鳩が彫られてあり、首を揃えて戯れあい、彫鏤が素朴であって形象がいきいきとし、蓋の四辺が傾斜して引っ繰り返ったお碗の形をし、蓋の真ん中あたりに窪んだところが一個所あって研石を置いておくのに使うのである。円形の硯面をし、縁あたりが低く、蓋を受ける仕組みになっているのである。硯底は、三本の獣の足が鼎立している。硯石は、黒い灰色を呈している。

漢硯の製形は、早期は素朴であり、晚期は複雑であって、したがってこの硯は、東漢のものと見られている。

この硯は、いま故宮博物院にて収蔵している。

(文章 楊玲 写真 胡鍾 劉志剛)



7 東漢獸形銅硯